

「ポラーノの広場」論のために

——現実の中の争闘から——

栗原敦

1、『春と修羅』補遺「自由画検定委員」と学校演劇の周辺

宮沢賢治生前唯一の刊行詩集（心象スケッチ集）『春と修羅』（大正13年4月20日、関根書店刊）には、印刷所に入稿した詩集印刷用原稿の大部分と、それよりも古い清書稿や下書稿若干と、他に、ともにブルーブラックインクで書かれた自筆原稿九篇が残されており、この九篇を旧『校本宮澤賢治全集』以来「『春と修羅』補遺」として取りまとめられている。中でも、九篇目の「自由画検定委員」は、詩集印刷用原稿と同じ「丸善特製 二六〇字詰原稿用紙に記され、下方欄外に記入されたノンブルによって、『春と修羅』原稿の成立初期に、「現存第一四二（一四三葉）」に

あたる位置に入れられてあったものであることが判明している。『春と修羅』第八章「風景とオルゴール」の章の「過去情炎」の次に相当するが、目次に記載された「過去情炎」の日付は「（一九二三、一〇、一五）」で、次の「二本木野」は「（一九二三、一〇、二八）」であり、二八二頁分の詩集編成の第一段階に対する編成第二段階において、「二本木野」および、続く「鎔岩流」によって差し替えられたのがこの「自由画検定委員」（末尾にまだ続く部分があったかも知れないが）だったのである。

この事実を踏まえて、かつて「『風景とオルゴール』の章二連作——『心象スケッチ 春と修羅』第八章の構成」（『宮沢賢治 透明な軌道の上から』1992・8、新宿書房刊に所収）で、差し替えの意図、効果を明らかにして、

その結果、詩集として新たに、あるいはよりいっそう明確にされることになったであろう主題が何であったかを論ずるために、必要な範囲で「自由画検定委員」について言及しておいた。

歴史的事実としては、大正十二年の「この年十一月十一日から十五日まで花巻川口町花城小学校で開催された『東北六県及び北海道連合家禽共進会』にあわせて開催された『県下小学校児童自由画展覧会』の展覧作品にちなむもの」で、すでに紹介してある「12 『春と修羅』第一集補遺『自由画検定委員』関係記事」（宮沢賢治周辺資料（その3）——「岩手日報」記事による——）『実践女子大学文学部紀要』第28集、1986・3）より一部を引用しつつ、一見すると奇妙にも思える「各連が、展示された児童の自由画の一点一点に該当する」叙述であると分かれれば、「児童たちの澁刺たる筆致、とらわれない自由な構想力の展開」があり、「そこに現在の私たちはひとつの歴史性として大正自由主義教育の持つ解放感を見出すこと」ができる。即した時には「単に超時代的な明るい空想が残されているばかりで」、「一本木野」・「鎔岩流」連作のような「自然と社会に挾撃されながらせり上げられてくる」「わたくし」の意識が集としての『春と修羅』の作品相互に呼应しあう

ような様相は見出せないだろうと述べておいた。

とはいえ、論中に引用した『岩手日報』十一月十一日付夕刊の記事、および資料として紹介しておいた岩手県内の児童自由画展などの関連記事が教えてくれる状況の方に焦点をあてて、若干の誤記を訂正しつつ、他地域の事例を照らし合わせて、もういちど掘り下げ直す必要があることを改めて痛感している。

たとえば、『岩手日報』で児童自由画が話題になるのは、大正九年九月の頃からで、盛岡市で「七光会が／自由画展／を併催する」として「七光会にては来る十月廿二日より一週間物産館に於て第十回作品展覧会を催す筈なるが同会にては之れと同時に目下教育界の大問題となり居る山本鼎氏の主唱小学児童の自由画展覧会をも併せて開催すべき計画にて目下市内小学校と交渉中なり」といった記事、十一月三日から十四日にかけては、佐藤瑞彦の「所謂自由画の指導（一）（二）」「最近の児童図画教育の風潮」「子供画を見よ／子供の画より教へられよ」「偽善の成績品を見て」「図画に対する新しき解釈と／自由への発展」「自由画の内容（上）（下）」「自由画の指導案」「鑑賞教授について」も掲載されている。

七光社（会でなく社）は、盛岡で明治四十三、四年頃に石川確の指導による洋画の集まりに始まり、大正三年創立

のシャベル社（あるいはオシャベリ社。清水七太郎を主体とする）と黄菊社（石川確・清水七太郎の主唱）とが、翌四年の南部藩七百年祭を機に合同して第一回七光社展覧会を開催した（細野金三『私説明治大正岩手の美術』昭和52・10、彩虹社美術協会刊）ものである。大正十年には十月十一日から七日間、十一年には十月（10・11記事）、十二年には十月六日から十日間（9・20記事）展覧会を開催。十一年秋には盛岡市山下サイカチ坂で共同アトリエの建設に着手（9・14記事）してもいる。

大正十二年の「東北六県及び北海道連合家禽共進会」は、稗貫郡農会が主催し、花巻町花城小学校を会場として、岩手県知事牛塚虎太郎を総裁に推し、郡農会長梅津善次郎を会長として開催されたものだが、花城小学校の階下で家禽と郡内名産品の陳列・即売を行い、階上で県内各小学校から集めた児童自由画と、七光社の移動洋画展覧会、その他菊花品評会、旧家及び名士の秘藏愛玩にかかる書画骨董品類展覧などを催し、生け花展や県下児童庭球大会なども企画された一大行事であった。

七光社の花巻での移動展は、すでに前年、大正十一年十一月に六郡の農産品評会が催された際に開催されていた。十一年十一月二十日に「期待される／花巻の絵画展覧会／七光社蜻蛉社の八十点と／同地研究員作品を集め／廿

五日から開催」の予報記事があり、盛岡で十月に開催されたばかりの展覧作品から運んでいるのであった。記事全文は既紹介の関係部分に拠って貰うとして、概要のみ拾えば、蜻蛉社は九月に結成されたもので七光社の弟分にあたる結社、一方「花巻には洋画研究会といふ若い画家の集まりがあるが主催者側や菊池英男鶴田栄吉菱川香郎阿部芳太郎似内絹子の諸氏が会場万般の整理に奔走中である」とあり、背景に「本正郡長や三鬼軽鉄常務菊池花電重役梅津清水の両町長等が後押し役である」こと、「同地の右研究会員の作品四十点も同時に陳列すべき予定であるし東京在住の洋画家も四五名出品する筈であるから当市絵画展覧会に劣らぬばかりでなく或はより盛大な絵画展が催されるか知れない又同研究会の肝煎りで県下の小学校児童の自由画展覧会も開催する筈で既に数百点の多数が集り会場は右絵画展に隣して二室に陳列することになつてゐる」とある。さらに、開催時の報道には「会場巡り」の「第九室」に七光社、地元の研究員会員の作品、児童自由画が一堂に展覧されていること（11・25記事）、観覧感想記が、阿部芳太郎、中島弥平、照井壯助、小田島専司、藤田謙の作品、斎藤次郎所蔵の中村不折の卒業制作「聖セバスチャン」に言及している（11、27記事。斎藤次郎は斎藤宗次郎の誤記、または誤植）。「後押し役」としてあげられている稗貫郡長は本正

吉三郎、岩手輕便鉄道常務は三鬼鑑太郎、花巻電鉄重役は菊池忠太郎、花巻川口町長は梅津善次郎（妻ヨシ、通称セツは賢治母イチの妹）、花巻町長は清水秀夫で、いずれも地域政財界の要人である。

この、大正十一年の展覧が機となつて阿部等が「雑草社」を結成し、翌十二年の児童自由画展へと続いてゆく。阿部は、紙・紙器を商いつつ絵を描いており、『春と修羅』の外函と、その文字は彼の作という。函は書籍用というより菓子折に近いハトロン紙張りだが、ヒラに貼られた白紙の白抜き枠内に、当時としては珍しい左横書きの手書き文字でタイトルが「春と修羅／心象スケッチ／宮沢賢治」の三行で刷られていた（背は「春と修羅 宮沢賢治」と縦書）。後述する、大正十三年八月の花巻農学校での田園劇上演に際しては舞台背景を担当しているなど、この時期の賢治の身近にあつた地元の芸術青年として忘れてはならない一人なのである。

再び、十二年の記事に戻つて、後半部には「自由な筆致に観衆の足を止めさせる／児童自由画展／県下の各小学校から集るもの／四百数十点に及ぶ」の中見出しで「本日は蓋あけの一道六県連合家禽共進会を機会として花城小学校主催の県下小学校児童自由画展覧会は陳列数四百数十点で、とらはれない筆致に観衆の足を止めさせてゐる」と記

し、雑草社の「人たちによつて毎年発表される展覧会の度には必ず児童の自由画を加へてゐる。本年は是非全国の児童自由画展覧会を催したいと言ふので花城校長千葉氏や似内君、花巻校長杉村氏や久保田君並に『雑草社』の同人によつて目論まられてゐたが京浜の震災等もあつたので是非なく中止されたと言はれてゐる。が県下の各小学校とも既に自由画も採用してゐるので見栄のするもの計りで会場が飾られてゐる」と結ばれていた。

九月に発生した関東大震災の災禍のために「全国の児童」の自由画の展覧こそ開催が中止されたとはいへ、花巻での児童自由画の展覧会自体は、「花城小学校主催」の文字通りに、校長、郡・県の教育界、地元農会・政界・経済界に至るまで、何の支障もなかつたようである。いわば祝福されて、華々しく成功裏に実施されたといつてよい。

しかし、全国的に見れば、児童自由画教育の展開とそれを取り巻く環境との間には様々な争闘が引き起こされてゐるのである。

以下、山本鼎の伝記上の事項は小崎軍司『夢多き先覚の画家―山本鼎評伝―』（1979・11、KK信濃路刊）によりつつ摘記するが、児童自由画の創唱者山本鼎は明治十五年に生まれた。小学校四年を修了して木口木版工房の徒弟となり、年季奉公を経て、東京美術学校西洋画科選科

予科に入学したのは明治三十五年。三十九年に同校を卒業。翌年、石井柏亭、森田恒友と「方寸」を刊行するなど伝統版画の革新運動を展開し、四十五年、二十九歳でフランスに渡り、版画、油彩画の研究を続ける。大正三年、第一次世界大戦の戦禍をロンドンに避けたりしながらパリ滞在を続け、五年に帰国の意を固めて、三月イタリヤに旅し、六月パリを立ち、夏にはモスクワに滞在して、十二月に帰国した。西欧近代美術の来歴を踏まえた上に、帰国前にモスクワで見た、児童への美術教育と、農民の工芸制作品が受け入れられている実態にうたれた経験が、その後の日本の啓蒙活動の基本姿勢を生んでいる。父、一郎が苦勞して開業していた医院のある長野県小県郡上川村（現上田市）大家の両親のもとに落ち着いていた山本の帰国歓迎会が大正六年正月に催され、金井正らとの縁ができ、翌年十二月、「自由画教育運動の端緒」である講演「児童自由画の奨励」が近隣教職員に呼びかけて神川小学校で行われ、さらに翌大正八年四月二十七、二十八日の神川小学校における「第一回児童自由画展覧会」開催の運びとなる。総数九千八百点のうちから千八十五点を選んで展示、「初日には六百人の聴衆」が集まり「鼎が自由画の主旨を、片上伸が『感情教育の現実及理想』を」「岸辺福雄が『児童本意の黒板拭き』」を講演。東京から岸辺に同行した『読売新聞』の記者や『信

濃毎日新聞』記者が大きく記事にして、世間の関心が高まった。片上はモスクワ滞在中に鼎と出会っていた。以後「自由画教育運動は大きな波紋を描いて長野県下から東京へ、そして全国的にひろがっていったのである。」

先に見た大正九年頃にはじまる『岩手日報』記事もこの流れの中にあつたわけだが、児童の感受性の開発、個性の自由の発揚を高唱する児童自由画教育は、伝統的な臨本模写、臨画を旨とする図画・美術教育観を批判し、対抗的・反抗的である。同時に、明治憲法下の臣民育成を旨とする統制主義、管理主義思想や教育観にとっては、明治以来の社会主義、無政府主義、それらの自我拡張思想としての展開や、新しい革命ロシアの労農主義（マルクス主義）の滲透は許し難いことであろう。これらが混ざり合いながら、それぞれの地域、政情、人的関係によって、実際の動きには様々な組み合わせが生まれていたのである。

群馬県高崎市では、花巻での展覧に先立って、大正十年二月に「高崎市公会堂で自由画教育の展覧会と講演会」が開催され、山本鼎、岸辺福雄、片上伸が登壇した。以下、熊倉浩靖『井上房一郎・人と功績』（2011・7、みやま文庫）によれば、「しかし、生沢英二『群馬県児童自由画展覧会』（『芸術自由教育』大正一〇年四月号）によれば、募集要項にクロボトキンの教育論が引用されていたことか

ら県学務課の介入があり、全県によびかけたものの出展は高崎市内小学校だけとなった。それでも、九〇〇〇枚近い出展と五〇〇〇人近い観衆が集まった。」というのである。

この催しは、地元の建築・土木を中心に種々の事業を展開していた実業家井上保三郎の子息房一郎が中心となったが、井上と山本の出合いは、大正六年に山本が星野温泉（現在の軽井沢町中軽井沢）に滞在中に富岡製糸場の場長だった大久保佐一と知遇を得て、大久保が山本にアトリエの贈呈を申し出て、翌七年夏に出来たアトリエが井上の実家の別荘の近くだったことなどによる。

前掲評伝で小崎も「市内の小学校で代用教員をしていた森銃三が、山本鼎が同県人であるという立場で手伝ったが、アナーキズムに興味を持っていた井上が、趣意書のなかにクロポトキンの教育論を引用しているのが群馬県学務課長の目にとまり、学務課ではあわてて県下の小学校長宛に出品は慎重を期すようにとの文書を付したので、出品を取り止めた学校が多くでたからである。」「この一枚の趣意書のために協力者森銃三は小学校を辞めなければならなくなった。」と記している。大正九年九月に、縁あって南小学校の代用教員になっていた森は愛知県の出身、山本の両親も岡崎が本籍である。ただし、森の解職の事情は、やや違っている。熊倉書には、自由画制作に「小学生の自然な反応

に対して、教師の参加は少なく、積極的に参加した『たった一人の学校の先生』が森銃三（一八九五―一九八五、後、東京大学史料編纂所教授）だった。森は、当時、南尋常小学校代用教員で、本展覧会や童謡投稿誌『小さな星』をめぐる校長との対立等で解職される。」としている。書誌学者として知られる森の著作集（正・続。中央公論社刊）にはエッセイも収録されており、関連する文章を探すと、「図書館の特別室」（『噫瓊音沼波武夫先生』昭和3年、瑞穂会刊）、「現代教育に対する私見」（『日本及日本人』昭和8・10〜12）、「過去を語る」（『典籍』第十一冊〜第十五冊、昭和29・4〜30・2）、「小さな星の思い出」（『子どもの館』（昭和49・4））が見出された。これらには、幾人かの敬愛できる先輩や同僚のことと共に、「全くの事務家で」「同一内容のものを同一方法で児童に注入せしめたい」という方針で学校経営にあたっている校長や、それに沿った学事会運営のあり方を批判する文章を市内の雑誌に投稿し、勤務校である南校以外の「他校の校長の怒まで買」って、市の助役から説論を受けたこと、その後は「公然書いたりする」のは慎んだことが書かれている。しかし、大正九年の内に知り合っていた東校の栗原長治と、その後、大正十年七月に童謡の雑誌『小さな星』の刊行を始める。当初二、三百部だったものが「県下一円に行渡り」、後には「三千部近く刷る」

ようになったといい、南校や東校の他中央校にも滲透したが、北校の校長とは衝突し、やがて校長会でも問題視されるようになった末、大正十一年三月の学年末、卒業式の四、五日前に、校長から「南校をよして貰ふことになったから、辞職願を出してくれ給へ」といわれたが、「辞職願」を出さないままにいたところ、卒業式後数日して封書で「解職す」との辞令が届けられ、解職されたという。栗原の方は、市外遠隔地校に転勤させられたのだった。

経緯は「現代教育に対する私見」が詳しく、これが発表された昭和八年は、すでに満州事変の開始後で、左翼共産主義活動等への弾圧と佐野・鍋山の転向声明が出されて転向の時代と呼ばれることになる年ではあるが、森の児童中心の自由主義的教育観が率直に記された評論である。また、童謡雑誌『小さな星』の刊行に関しては「小さな星の思い出」が詳しい。大正十年の自由画展覧会に関する記述は著作集収録の文章には見えないが、敬意を抱いた図画の専科訓導にこの雑誌制作のための図案やカットを描いてもらったり、やがては『小さな星』の表紙に、子供の自由画を原色版にして貼付したいなども相談し合った」と記しており、共感が示されていた。

前掲熊倉書に、高崎市のホームページ「たかさき一〇〇年」記事によって森が「誡られた教師の手記」を『上毛新

聞』に七回にわたって連載した後、高崎を去ったとあったが、この連載は著作集には未収録と思われるので確認してみると、大正十一年四月十六日から五月三日にかけて、全十四章に渡って連載され、三月の辞職願を迫られた日のやりとりから解職までの具体的やりとり、遡って、この学校の校長の教育観、姿勢や振る舞い、些末、権威主義、児童の発育のためではない、統制的、画一的で、その意味で真に教育の責任を果たしているとは言いがたい、滑稽にも見える様々な実状をつぶさに紙上に提示している文章であった。

また、この期間の四月二十三日には、鈍武羅（「ドンブラ」と読ませるのであろう）の署名で「教員虐殺」という一文も掲載されていた。これは「市長 ドルキン」と「教員 ダイギス（市長の犬を勤める男）」の対話で、彼らにとって反抗的だったり、扱いにくかったりする教員、出産女子教員などを拾い出して、首切り、僻地への配置転換の処分を企んでいる様子を、戯画的に描き出したもの。連載中の森の文章と重ねれば、不当な誡首や異動の内情を暴露することを意図した創作と見られるのだった。

かくして、大正十年二月の高崎での児童自由画展覧会および講演会、十二年の花巻での児童自由画展覧会を巡る周辺環境には、かなりの差が生まれていたことが分かる。そ

れは、個々の具体的場面に即すれば、関わった個々人の振る舞いの結果とも見られかねないが、その実、いずれも、より大きな時代の枠の中で現れに他ならなかった。

大正十二年十一月の、花巻での児童自由画展の明るさは、宮沢賢治の花巻農学校では、遡る四月の郡立稗貫農学校の甲種農学校への昇格・県立移管に伴われた明るさを引き継ぎ、翌年十三年八月の田園劇試演開催を頂点とするまで続くものだったと見られるが、関東大震災以降に一段と深まる国家的な思想統制、学校教育統制の圧力は確実に影を深くしつづつあつたのである。

なお、付け加えておけば、井上房一郎はその後、山本からパリ留学を勧められ、大正十二年二月に出発。昭和四年十二月の帰国まで七年近く滞在した。帰国後は、父保三郎が井上工業株式会社に改組していた家業の取締役を務めるとともに、自ら工芸運動を興してそれを支え（父保三郎は、すでに、昭和二年の金融恐慌を受けた四年に高崎副業会を創設させていた）、商都高崎と周囲の農村部との関わりにも心を配り、高崎駅前通りの舗装、街並み整備にも貢献し、敗戦後も音楽運動、美術運動を支援し、文化的パトロンとして多大な功績を残した。一方、農学校教諭を退職して羅須地人協会活動に入った宮沢賢治が、農家家計を支えるために種々の副業研究にも着目し、花壇設計などを介した地

域環境の再編、また演劇や音楽活動などにも目配りしていたことは、現実的にはささやかな個人的な資力と範囲、しかも自らの健康を損なつて、あまりにも短い期間の實踐に終わったために、同じレベルでの比較が不当にも見えるかも知れないが、構想と試みという観点から見るとき、井上と宮沢の両者を相互に比較して考察することは、充分可能で有益なことではないかと思う。¹⁾

2、学校演劇の周辺

少年小説「ボラーノの広場」の最終形に至るまでには、童話（少年小説）と戯曲とが相互に交錯しつづつ形成されていった経緯がある。そこには、前章で児童自由画を巡つて辿つたのと同様に、現実の中での様々な争闘の影が落ちていたのである。

大正十年十二月に、前任の岩崎三男治が徴兵のため退職したのを受けて郡立稗貫農学校教諭となつて間もない頃、友人保阪嘉内にあてて、「度々のお便り」にも無沙汰したことを詫び、「何かからかからすつかり下等になりました。」と卑下するような身振りながら、「しきりに書いて居ります。書いて居ります。お目にかけてたくも思ひます。愛国婦人といふ雑誌にやつと童話が一二篇出ました。一向いけ

ません。学校で文芸を主張して居ります。芝居やをどりを主張して居ります。けむたがられて居ります。笑はれて居ります。授業がまづいので生徒にいやがられて居ります。」云々と書いてある（推定十二月、日付不明）。

「愛国婦人」発表作は、十二月号と翌年一月号に分載された「雪渡り」だが、手紙はなかなか屈折の多い言い回しで、自己批評と自己主張が入り交じり、受信人との関係も、また教員として歩き出したばかりの不慣れや緊張そのものをも反映しているようだ。農学校での「文芸」、「芝居やをどり」の「主張」というのも、教科、授業科目それぞれ自体に即しているわけではないから、理解するには意外に難しいところがある。

教え子たちの回想によれば、授業のまずさは、やがて、教科内容を独自に精選すること、専門性の実際の適用、すなわち具体化と絞り込みによって、分かりやすくして高度な実践的内容を身につけさせるものへと変えて克服していったと見られるが、「文芸」や「芝居やをどり」はどうだったのだろうか。

おそらくは、稗貫農学校当時の校風、教育の現状、基本姿勢、根本精神に関わることで、学校や生徒の雰囲気を作るものに対する意見や主張に関わっていたのであろう。隣り合わせた花巻高等女学校の、より恵まれた階層の家庭

から通う、年ごろの近い女学生を意識して劣等感などにうちひしがれがちだったことなどは、すぐに見て取れたはずで、移動や、集団行動に際して意気をあげるための「行進歌」や「応援歌」、農業の営みの根本理念を象徴し、目には見えにくい理想に向かう姿勢を獲得させようとする「精神歌」の制作などは、手紙には書かれていなかった音楽をも融合させた「文芸」なるもの主張だったのではなからうか。

「芝居」と「をどり」は、大正十年に家出して奉仕活動に従事していた日蓮宗在家団体である国柱会の主宰者田中智学も重視したのだから、発想としては関わりがあるかも知れない。「行進歌」等を機関誌『天業民報』に投稿していることからそれは伺える。とはいえ、具体的な現れは、田中の演劇が宗祖を題材にした歴史劇、宗教劇であり、踊りは日本舞踊だったのと比べれば、全く次元を異にしたものになっていたのである。

宮沢賢治と演劇との関わりについても、拙稿「宮沢賢治と演劇」（前掲書所収）で詳述しており、参照いただければ幸いだ、生徒の回想によれば大正十一年の春には英国皇太子の来日を題材にした寸劇が書かれ、「饑餓陣営」の初稿「コミックオペレット『生産体操』」が六月（表紙に「（一・一・六・二〇・）」の記載が残されている）に書かれ、

やがて、十二年四月の甲種学校昇格・県立移管を受けた五月二十五日の県立花巻農学校開校記念行事として「植物医師」「饑餓陣営」の上演となつて実り、さらに翌大正十三年八月十日、十一日に昼夜二回にわたり花巻農学校講堂で「田園劇試演」（自作の謄写版印刷招待券の記載による）「饑餓陣営」「植物医師」「ポランの広場」「種山ヶ原の夜」の四本立て公演を行うのである。上演に要した経費は全て賢治の自弁だったが、畠山栄一郎校長の挨拶、白藤慈秀教諭の劇梗概の紹介もあり、農学校あげての催しの態をなし、翌年刊行の『花巻農学校校友会々報』二号（大正14・6）「芸部便り」にも詳しく報告されていた。

「田園劇試演」の「ポランの広場」は、草稿表紙bでは「ファインタジー／ポランの広場／第二幕」（『花巻農学校校友会々報』二号でもほぼ同様に紹介されている）と、白抜きレタリング文字で記されている。それ以前に書かれていた童話「ポランの広場」（表題は推定）の「三 ポランの広場」をもとに脚色したことは間違いない。

この童話の草稿は、冒頭原稿や末尾をはじめ、所々に欠落があつて全体を確認することは難しいが、大略、以下の如くである。

冒頭の章は末尾のみで、「私」が散歩の途上で「ファリーズ小学校の生徒」のひとり（ファゼーロにあたる）とすれ

違つて終わる。

次の「（二） つめくさのあかり」の章は、「それから四十日ばかり」たったある日の夕方、突然、ファリーズ小学校のその子どもがやってくる。やや乱暴な言葉遣いで硝石をほしがったりするうちに打ち解けてきて、月の満ち欠けや、ファリーズ小学校の算術などのファンタジックな会話をし、つめくさの花の「あかり」の説明から、花の「あかしの番号」を数えてたどりつけるという「ポランの広場」の探索話に進んで、昨夜の邪魔者、馬車別当や又三郎との交歓の話などになって、ファゼーロ（その名はチョッキに縫われた文字で知られた）は帰る。

「三 ポランの広場」は「丁度五日目の火曜日の夕方」、「すきとほった口笛」を予告にファゼーロが誘いに来て、満点の七千の直前までつめくさの数字を見つけておいたとポランの広場の探索に誘う。やがて、立派に整えられた野原の会場に着く。「ポラン広場衣装係」の用意や不思議なファンタジックな手順によつてそこにふさわしい身なりになるなどして宴席の客になる。この章は威張り散らす山猫博士とファゼーロの決闘がファゼーロの勝利に終わり、山猫博士は退散し、宴はみんなのものになつて盛り上がる。私はまたいつか来ることにして、今日は盛り上がっているみんなには言わずに帰ろうとファゼーロを誘い、つめくさの花

の数を数えて戻る。帰り着いた時刻は深夜二時だった。

次の「四」章にあたる部分は冒頭を欠くが、「十八日までは仕事も一段落ついでいよいよ明日からは割合ひま」になる夕方、ファゼーロがやってきて硝石を求める。私がまたポランの広場に行こうと誘う。ファゼーロは一旦はつめくさのあかりがなくなる時期だから難しいと答えるが、野原をよく知る羊飼いのガルを頼れば行けるかも知れないと思い返して、連れだって出かけることになる。野原で出会ったファゼーロの友だち等とともに探索するが、行き着けず、帰るすべをガルに教えて貰う。末尾近くにも欠落があり、詳細は不明だが、みんなと別れて、「私は家に帰る。次の章は冒頭を欠く（推定「五」章）。私は局長から慰労休暇の意を含んだイーハトブの海岸へのひと月の出張を命じられる。出張中のことは「あとで別におはなします」との弁明を挿みつつ、九月一日の晩に戻り、翌二日に役所に出て早く帰宅したことまでが記され、それ以降の草稿は残されていない。

少なくとも五章まではあったと見られる、以上のような童話草稿から劇「ポランの広場」に脚色するに際して、「三ポランの広場」のみんなが盛り上がるあたりまでを「第二幕」としたのはどういう考えからだったのだろうか。

想定できる「第一幕」は、童話そのものを丸ごと前提に

するならば、第一章と第二章をまとめたものに相当するのだろう。そして、野原での、質素で、粗末といってもいい衣服を飾り立てた衣装に変える魔法の部分を除いた上で、単なる衣装係が用意する立派な衣装による野外広場でのパーティーと、山猫博士とファゼーロが決闘する「第二幕」に相当する一幕物に仕立てて、威張り散らした山猫博士が逃げ去ったあとの葡萄園農夫の演説になり、他人と比べ合うような精神を乗り越えて、夜の銀河の微光に洗われ、野原のつめくさのあかりに照らされて、愉快に夏の祭を歌いあかそう、自然の光や宵闇や影が飾ってくれると主張させて結ぶのである。まさしく、この結びを持つ劇「ポランの広場」は、農学校の田園劇にふさわしいものといつてよい。劇の草稿でも、ファゼーロがファリーズ小学校の生徒であることは変わらないが、野原のパーティー会場で最初に山猫博士と握手する紳士が、草稿の書き出しではファリーズ小学校の教師であったのを曠原紳士へと手入れしている（一部に「教師」で残った箇所もあるが）のも、農学校での「田園劇」に似つかわしくする意図を示しているよう。

とはいえ、葡萄園農夫の発言内容は、何らかの徳義上の精神を主張する形のものであって、気高い精神の現れではあるが、その意味では、童話「雪渡り」の中で、狐小学校の精神として生徒たちが声を合わせて叫んでいた「狐の生

徒はうそ云ふな」「狐の生徒はぬすまない」「狐の生徒はそねまない」といった徳目と質を同じくする、教訓的な主張の提示に沿う形のものであった。

先にも記したように、実質的には花巻農学校あげての催しとなった大正十三年八月の田園劇は、『岩手日報』八月五日に「花巻の素人／田園劇／十日同地で」の見出しで「稗貫郡花巻絵画研究会雑草社全人により二三年前から計画されてゐた田園劇」が、いよいよ「稗貫農学校の教諭宮沢氏の作」で「宮沢氏雑草社全人生徒二十九名により」公開されることになったとの記事が掲載された。阿部芳太郎が劇の背景画を担当しているから、おそらく雑草社の仲間たちの支援もあり、その関係者からの情報によつた記事と見られている。

成功裏に終わったこの二日間の田園劇試演の実際とそれが生徒たちに与えた意義、そしてその後についても拙稿「宮沢賢治と演劇」に記したが、関東大震災を機に露呈した社会状況の動揺に対して発せられた「国民精神作興二関スル詔書」（大正12・11・10）を踏まえた清浦奎吾内閣の「国民思想の善導」方針に基づく文部省の児童劇に対する規制の動きは、護憲三派による加藤高明内閣（大正13・6・11成立）においても変わることなく、岡田良平文部大臣の地方長官会議での発言を踏まえて、九月三日には次官通牒に

よつて直轄学校長に実質的な「学校劇禁止」を命じ（『岩手日報』9・13夕刊）、これを受けて、岩手県学務部からもこれらに応じた通牒が出されることになったのである。

花巻農学校も県立学校として例外であるはずはなかった。浮華放縱批判のキャンペーンが自主的、主体的な活動への統制的抑圧として及ぶことになっていった。学校で演劇を行えなくなった賢治は、楽器を集めて合奏を試みようとするが、それは十分に展開するには至らなかつた。

3、農民劇試演「ボランの広場」六幕物の構想と「ボラーノの広場」

ここからは先を急がなくてはならないのだが、すでに大正十四年の新学期に入った頃には、卒業した教え子や友人に、翌春には農学校の教員をやめて、「本当の百姓」になるという意向を表明する書簡が記されるようになる（四月十三日・杉山芳松あて、六月二十五日・保阪嘉内あて、六月二十七日・斎藤貞一あて）。先に見たような、県立諸学校を巡る県学務部を始めとする様々な制約に対して、教壇の上に立ち、県の職員として求められる様々な制約を離れない限り、自由な活動は出来ないという思いが募つていたのであろう。もちろん、大正十五年一月から、花巻農学

校を会場に開催された岩手国民高等学校への関わりぶりを見れば、これらにも一定の新しい可能性を感じていたとも見えるから、困難を覚悟しつつも、退職後に新しい生活が開かれる期待も抱いていたことであろう。

弘前の連隊に入営していた弟清六との間でも、除隊後の清六の職業と賢治自身の身の振り方を合わせて、宮沢家の将来をどう引き継いで行くかの相談が行われていくことになった。残された書簡以上に内実を伺う資料は多くはないが、妹トシの死によって鋭くされた利他的精神と、関東大震災が与えた文明的ともいうべき衝撃を前提にしつつ、賢治は農学校における生徒の家族・家を介して知る農家の困難への認識を深める他、農学校教師として依頼される農事講演などの機会を通じて、諸団体、農事実行組織や産業組合、またその青年会などが直面する課題にも、真剣に向き合うことになっていったのだと思われる。⁽³⁾

後に試みられ、未完のまま残された「（或る農学生の日誌）」には、農学校生徒の一実例とでもいうべき、跡取りとして農家を継ぐべき若者の実状を記録しようとした意図が感じられる。「銀河鉄道の夜」と対比する趣旨においてはあるが、「銀河鉄道の夜」の生成と「（或る農学生の日誌）」（『実践国文学』84号、2013・10）で取り上げたので参照いただければ幸いである。

除隊後の清六が家に残って建築金物等を扱う宮沢商会を開業するのと平行して、賢治は郊外の桜の別宅を改装し、花巻農学校を退職して、やがて羅須地人協会と名付けることになる農村活動に、大正十五年四月から踏み出してゆく。

羅須地人協会活動の意図や実状の詳細は省略するが、目標とした農村文化・芸術活動の一つに、農民劇団の構想があつて、昭和二年一月三十一日の『岩手日報』夕刊に掲載された活動の紹介に「農村文化の創造」が掲げられ、その中で「目下農民劇第一回の試演として今秋『ポランの広場』六幕物を上演すべく夫々準備を進めてゐる」云々と報じられた。

この「ポランの広場」六幕物が童話や農学校での一幕物（第二幕）とどんな関係にあつたか、大いに関心を抱かせるところだが、内容は、草稿も伝聞も残されないままに幻に終わってしまう。

「新校本全集」の「年譜」に記載したことが、時日不明ながら、この記事との関連で、花巻警察署長警部伊藤儀一郎⁽²⁾による事情聴取（ただし「呼び出し」によるある種の注意・警告なのか、立件含みの「聴取」なのかははっきりしない）があり、それを踏まえて、活動が自粛され、集まりも不定期になったとの回想がある（伊藤克己による）。二月には比較的多くの集まりの記録があり、聴取は三月に

入ってのことかと推定されるが、確実な所は分かっていない。伊藤は花巻警察署長を二度務めており、これは、最初の大正十五年九月二十五日から昭和二年六月十八日までの間である。大正十四年の普通選挙法の公布により、全国的に市町村議員を始めとして、無産政党の進出が始まったこと、社会主義政党、非合法下の共産党の動向などを警戒する取り締まり当局の対応の一環だったろう。羅須地人協会と稗貫郡内の労農党（労働農民党。上部団体としての指導体制には、時期により右派、左派の主導権争いがある）の双方に関わるメンバーもあること、賢治自身が労農党稗和（あるいは稗貫）支部の活動に協力していたことから、聴取が行なわれたものと推察できるのである。

花巻における賢治には、児童自由画展覧会の後ろ盾になつてくれた人脈にうかがわれるようなものがあつたから、取り締まり当局に予備的な注意喚起の段階を踏むようにさせたのかも知れないが、目立つ演劇活動は自肅を余儀なくされた。とはいえ、聴取による演劇の抑圧に、単純に自肅で屈服したと断ずるべきではない。六幕物の演劇（戯曲）「ポランの広場」は、賢治の中で改めて組み替えがはかられて、長篇童話Ⅱ少年小説への道を歩み始めることになったのだといふべきなのである。もちろん、発表や表現の仕方への警戒心や慎重さが一層必要となる立場になつた

わけだから、残された草稿や発表原稿にもその影が落ちたにちがいないことを、我々も充分心に留める必要がある。

最終形の作中時間に、歴史上の「一九二七、六、二九」の日付が使われていることは、作品執筆や手入れの時期を枠付ける意味もあるが、また、「ポランの広場」や農学校での演劇などで示されていた、楽しい別世界としてのファンタジーとは位相を異にした、現実的な小説のベースに作品世界を位置付け直したことをも示しているであろう。

本文研究としては、先の童話、少なくとも五章まではあつた「ポランの広場」に、短篇「毒蛾」を差し挟み、センターの空間や、モリーオの中にも、野原と植物園などの他に警察署の空間をも立ち上がらせ、童話「ポランの広場」では別の機会にお話することにしていたイーハトーブの海岸での空間、そこでの出来事を描いて、地理空間の配置や、組織や制度に関わる構成を確実なものにしている。そのことが、作品の最後のトキオオとイーハトーブとの距離の確保、そして、実は七年という時間的距離の新たな設定を可能にさせるパースペクティブをも呼び込めるようにさせているのである。

さて、ようやく最終形「ポラーノの広場」を正面に据えて、論議し直すべきところに辿りついたようだ。とはいえ、独立した種々の作品論も積み重なっているので、もう一度

機会を改めて吟味し直すことにして、今は、ひとまず、以下のことを走り書き風にメモしておくに留めたい。

作中に記された「一九二七、六、二九」の日付からおよそ一年後、賢治は「東京ノート」と題して詩篇などを整理したノートに、「一九二八、六、一〇」の日付を添えた詩篇「高架線」を収録している。その中に「ひかりかゞやく青ざらのした／＼労働党は解散される」の詩句を書き記した。これは、四月十日に田中義一内閣が安寧秩序を害するものとして労働農民党および日本労働組合評議会、全日本無産者青年同盟の三団体に解散を命じたことを受けてのことである。一定の距離を保ちつつも、同伴するごとくに羅須地人協会が境を接して活動していた労働党への解散命令は、公的な組織によらない自由な地位や活動など、とうてい許されるはずがない現実との争闘の険しさを、一層明らかにしたのである。そして、この夏の天候不順への対応等の過労から、第一回目の長い病床生活が始まり、羅須地人協会活動の中断を余儀なくされたのだった。

この病床生活の最中に、若い友人や知人の多くが逮捕・拘留された出来事がもう一つある。それは、昭和五年十一月に検挙が始まった岩手共人會事件である。この年の八月に水沢でプロレタリア文学の懇談が行われたのを機会に、東京在住の十人を含む岩手の文化人・学生など百人以上が

治安維持法違反容疑で検挙された。「新校本全集」年譜407・408頁、注*28に示しておいたが、取り締り当局による全くのフレームアップ事件である。検挙者の内には友人梅野健三、森莊巳池、教え子の小原忠などがある。事件の報道解禁は昭和六年四月十五日だが、賢治は、それ以前の十二月のうちに、四十日近い留置ののち釈放された梅野を訪ねて見舞金を贈り、また首謀者として起訴・収監された織田秀雄の留守宅に支援のために肥料を送っている。

「ポラーノの広場」の「四、警察署」の執筆時期との関係が微妙ではあるが、自身の聴取体験とこれら知友の間わり深い出来事との響き合いを認めることも許されるのではなからうか。

また、物語りの語り手、重要な証言者であり、主人公として扱えなくもないレオノ・キユーストについても、種々の課題がある。冒頭の「レオノ・キユースト誌」と「宮沢賢治・訳述」の問題とも関わる。これも改めて論述する積もりだが、他の作品とも合わせて見るために、隠しながら顕し、顕しながら隠す仕掛けの意味への注目が欠かせないことを指摘しておきたい。作品の発表において匿名を選ぶことに関しては、「雨ニモマケズ手帳」に、名を表さない場合への言及があること、「手紙(一)」「(四)」の例、「法華堂建立勸進文」の匿名の注記「東都文業某」などがある

ことを視野に入れて考察するべきである。また、検閲や摘発への対応の側面もあるが、併せて本作の場合は、重層化によって、ひとつの歴史史料としての「誌」とさせる効果が求められている筈である。

キューストの職階・等級の変遷と、他作品「黄色のトマト」など、類従のプランの考察も必要だと考えている。

キューストに末尾の歌の作詞者が誰かわからないとさせた意図については先行論もあり、芸術の普遍性に繋ぐのもうなずける点はあるが、農民を主体とさせたい思いは(旧来のプロレタリア階級至上論ではなく)、法華経湧出品の菩薩を農民に重ねる発想を秘めていたかも知れないと思えるのである。

以上で「ポラーノの広場」論のためのメモをひとまず終わる。

注

(1) 宮沢賢治が羅須地人協会の活動に踏み出す際、どのような思想的な考えを抱いていたかを伺わせる資料として、大正十五年一月から花巻農学校を会場として開設された岩手国民高等学校での講義「農民芸術」の内容(受講者伊藤清一の受講ノートが残されている)、およびそれと密接な関わりを持っていただろうと思われる「農民芸術概

論」関連資料(「農民芸術概論綱要」ほか各論の構想案)があることはよく知られている。山本鼎が児童自由画教育と合わせて提唱した農民美術運動とこれらの関連も興味深い課題であるが、残念ながら現在までの所、直接の影響関係を検証できる材料は明らかにない。

週れば、大正六年二月頃以降盛んになった民衆芸術論の議論を一つの基点として、山本の農民美術運動を挿んで、プロレタリア芸術論をも視野に入れつつ、なお芸術即人生の担い手を農民としての存在に託そうとするところに賢治の独自性があるように思われるが、浮世絵版画を収集したこともある賢治の、複製芸術としての浮世絵版画の価値を認める観点への評価も合わせて、まだまだ多くの課題が残されているというべきであろう。

なお、NHKテレビ放送「英雄たちの選択」で宮沢賢治が取り上げられたとき(第123回、2017・11・16放送)、座談会メンバーの赤坂憲雄氏が賢治と浮世絵の関連に触れて、それを専ら春画の方に繋いで、賢治が買いあさったので神保町の古書店での値が上がったというようなことを発言されていた。気づかなかった人も多いかもしれないが、これまでのところそんな話は典拠が見あたらない。花巻でレコードが沢山売れるので会社で問い合わせたところ、その多くの買手が賢治だったという話と取り

違えていたのではなからうか。宮沢賢治聖人観への毒消しにしたい意図が含まれていたかとも推測されるが、いずれにせよ、ちよつとの違いが大きな誤解を招きかねないので、付記しておく。また、花巻温泉の花壇設計に賢治が関わったことや「魔窟」の語を含む詩篇（「一〇三三 悪意」）を書いたことは確かだが、経営者は盛岡の金田一国土。父政次郎が花巻温泉の経営に関わって、それを踏まえた作品だと氏が扱ったのも誤り。これも、大沢温泉や西鉛温泉との縁や花巻電鉄などとの関わりを安易に花巻温泉と同一視したものであろう。

(2) 「旧校本全集」の年譜（担当は堀尾青史）では、二月一日の『岩手日報』記事の項目の末尾に、「日時不明（三月か）であるが、花巻警察署伊藤儀一郎の事情聴取があったためと思われる。」とのみ記載されていたが、及川常作編『岩手県警察史』（昭和32・12、岩手県警察本部）によって、職名、職階、在任期間等が分かった。なお、国際日本文化研究センターの文明研究プロジェクト室により2003・8・19～21に星野温泉にて開催された夏期研究会において、栗原は20日の「宮沢賢治周辺資料を巡って——斎藤宗次郎・宮沢政次郎」を報告したが、その際に伊藤による「事情聴取」の件についても言及したところ、報告の後で、山折哲雄氏は、伊藤の妻はご自

身のおばであるといわれ、初めて聞いたことで驚いたと語られた。

(3) 産業組合についても、岩手県内務部編の『岩手県産業組合要覧』によって実情を知ることができることは拙稿「はげしく寒く——産業組合青年会」と「業の花びら」（前掲書所収）に示しておいたが、近年、大島丈志、牧千夏、中嶋信によって、調査、論及が深められている。

(4) 岡村民夫に、舞台とされた地域と構想に関わる諸論及がある。

(5) 森莊已池「昭和六年七月七日の日記」（『宮沢賢治の肖像』津軽書房、昭和49・10）

(6) 語りをめぐる論及としては、小森陽一や押野武志らのものがあるが、向きを変えて組み替える必要もあろう。

（くりはら あつし・実践女子大学名誉教授）